先生の庭

春名　純子

長い時間が過ぎたので道も人も薄れていて
拙い言葉の私は　やっと先生の家を探し当てたのです
開け放たれた玄関に立って「ただいま」と声を掛けたけれど
誰も出て来ません
気配だけ残して　みんなはどこへ行ったのでしょう
庭で空を見上げる一本の糸杉の側で黄色とピンクの木の花が
群れて咲いています

首輪に金の鈴を付けた三毛の小猫を見掛けませんでしたか
「フランダースの犬」の話はよしましょう
プロコフィエフの「ピーターと狼」を誰が先生と聴きに行ったかって
　いいじゃありませんか
風の日には風車の話をしましたね
手作りの竹トンボは空高く飛び
子供たちは　ちち　ははを越えて遠く行きました
ある日　私たちは「また会う日まで」と歌いました
でも　また会えるなんて誰も信じていませんでした

開け放たれた玄関が黙って送り出すので
私は春の道を帰ります
影がついて来る真昼です
風が吹くから歩きます
過ぎて行くこれらすべてが　たぶんもう
先生の家です
胸に少女を閉じ込めたまま少しずつ　白い石の階段を上って
私はもうすぐ先生の庭の糸杉の側で
一本の木の花になります